

メインテーブルのない祝賀会

山元眞

やまと・まこと

行橋カトリック教会司祭

神の想い

聖書、とくに新約聖書の中の福音書にはイエスの言動が記されている。

それは、私たちが知っている伝記のようなものではない。イエスと生活を共にし、イエスの受難・死・復活を経験した者が伝えていったことを、あるとき、ある人が編集した書き物である。それを読む者は、イエスによつて示された「神の想い」のようなものに気づかされ、そのように生きられたら、と一種のあこがれのようなものを感じる。さらには、ときとしてその「神の想い」はそれを聞く人の人生観を変え、その人の生き方そのものをも変えてしまう。一般に思われているような勧善懲惡の書き物、もしくは捷が書き記された書物ではないが、強いていうならば、

「愛の掟」の書ということはできるかもしれない。「神の想い」に気づき、神の望みを生きようとするとき、本当の幸せへの道を歩むことになる。

神の想いを行うこと

な想いに気づかされる。何か事を行うとき、その想いを受け止めて、神の望まれるように努めるとき、神は喜ばれ、人も心からの喜びを味わうことができる。一つの例。教会の創立記念日をどのように祝ったかを紹介したい。

みんなが集まる

創立記念日は五十年前と同じ日曜日。この日、できるだけ多くの人が集まって神に感謝したい。そのため、少なくともこの教会に所属しているすべての人にこの記念日を一緒に祝うことを伝える。第二次世界大戦後、日本では各地で多くの教会共同体ができた。そのため、近年では創立五十周年を祝う教会が多い。カトリック新聞などでその様子が紹介

されているが、いつも気になることがある。それは、その教会所属の信者数よりはるかに少ない人数で祝っていること。この教会の所属信者数は一つの巡回教会も合わせて約七百八十人。みんなで祝いたい……。当日は他の教会から、また、幼稚園やボーイスカウト、ガールスカウト関係者も祝いに駆けつけ、千人近い人々で祝うことができた。

貧しい方々のことを想い

いろんな意味で貧しい方、貧しくされている方々のことを想い、一緒に祝うことを考えた。何よりもまず私たち一人ひとりが「貧しい者」であることに気づかされた。つまり、神なしでは生きられないことに気づかされた。それは、聖書の言葉に照らされて自分たちの信仰を見直すこと

で教えられた。記念式典の予算を組んだ。いろんな経済状態にある方のことを考えた。予算は自由匿名献金で集めることにした。式典の五か月前から始めた。予算の三倍近い献金が集まった。式典当日の献金と余剰のお金は全額寄付することにした。

差別のないように

案内状を出して、一緒に喜びを共にしていただけるように呼びかけた。祝儀は受け取らないことを案内状に書き添えた。招待状は出さなかった。従って来賓受付もなく、招待者のリボンもない。特別席もない。感謝ミサを司式した司教も、司祭も、参加したボリビア大使や市長も議員も皆神の前で平等なのだから。お祝いの挨拶も最低限度にとどめ、共に集ったみんなで食べ、飲み、会話を交わすことを大切にしたい。料理は持ち寄り。テーブルに乗り切らないほどの食べ物、飲み物が持ち込まれた。たくさん余ったが、参加された方にはほとんどすべて持ち帰っていただいた。メインテーブルのない祝賀会。気持

ちがよかった。メインテーブルは主が準備してくださった食卓、祭壇なのだから。

感謝のミサ

ミサは幼稚園の園庭で行った。聖堂では全員が入りきれない。幼稚園のホールにモニターを置いてそこに席を設けることも考えたが、とにかくみんなで一緒に祈りたい、ということでした。十一月下旬にもかかわらず野外でのミサを計画した。聖歌の伴奏は青年たちを中心としたバンドが担当した。体の不自由な方、幼児と一緒に参加する方のためによく見える教室を準備した。その二つの部屋にはモニターも用意した。前日の夕方からひどい雷雨に見舞われた。当日の朝まで続いた。心配した。しかし、計ったようにミサの三時間前には好天に変わり、ミサ、式典のときにはさわやかな風が吹いた。埃ひとつ立たない素晴らしい天気になった。黙々と濡れたパイプ椅子を拭く人たちの姿が美しかった。

教えられたこと

創立五十周年を祝う準備をしな

ら、たくさんの方に気づかされた。祝うのは私たちではない。祝いたいのは神なので、神が祝いたいように祝うことが求められること。そして、そのようにすれば、そのようになるということ。神の想いは何なのか。それを求め、気づくことが最も大切なことであることに気づいた。私たちは、その手伝いをするにすぎない。できることをできる人ができる形で。後は神が補って完成してくださる。天気も人も物も、すべてが与えられる。

いろんな心配

準備する過程でいろんな心配があった。でもそれは杞憂にすぎないことが終わってみてはつきりとわかった。持ち寄りの食べ物にしても、決して足りないことはない。なぜなら、みんなで分け合えばみんなに行き渡るから。「明日のことを思い煩うな」。神の想い、望みがこの世界に実現するさわやかさを体験した。

キリスト教礼拝・礼拝学事典

監修：今橋 朗 竹内謙太郎 越川弘英
編集協力：川端純四郎

2月20日刊行予定
呈・内容見本

特価 8,925円
2006年6月30日まで

カトリック、プロテスタント、日本のキリスト教界が総力を結集。105人が書き下ろした400項目！

●概説、歴史、教会暦、諸儀式、礼拝書、祈祷書、建築、音楽他、現代の諸問題を含め、礼拝の理解に必要な全項目を網羅。●教会堂建築、結婚の諸問題、葬儀、礼拝の心理学など、教会、教職、信徒それぞれに必要な知識と最新の情報を提供。



ミゼフ・ピタウ大司教 推薦
さまざまな教派の執筆陣も魅力です。客観的に多くの観点から礼拝を研究され、たくさんの知識を得ることが出来ます。(抜粋)

バッハの宗教性に光を当てる

神には栄光 人の心に喜び

J.S.バッハ その信仰と音楽 H.ヴェアマン 村上茂樹訳
スイスのバッハ研究家が、その音楽の源泉となった神学・信仰面に着目し、生涯、人柄、作品について詳細に解説する。 四六判・128頁・1,470円

日本の説教Ⅱ 全14巻〈第4回配本〉

6 島村亀鶴

解説
新堀邦司



身近な話題、俳句に鍛えられた話術と人柄。その説教は聴衆を惹き付けた。 四六判・252頁・2,730円